

# 日本映画史 コレクション PART II で見る

Japanese Film History  
in Posters, Part II  
From the Collection of Kyohei Misono



東京国立近代美術館フィルムセンター展示室(7階)

1998年11月3日(火)ー12月4日(金) 12月15日(火)ー12月26日(土)

午前10時30分ー午後6時(入場は午後5時30分まで)/休館日:12月5日(土), 12月8日(火)ー12月12日(土)および日曜日・月曜日/入場無料  
主催=東京国立近代美術館フィルムセンター

1995年の京橋新館オープンを機に御園京平氏より寄贈された約3,000点の映画ポスターは、フィルムセンターの最も重要なペーパー・コレクションの一つとなっています。これらのうち、主として戦前までの貴重なポスターを展示しながら、我が国における映画の始まりとその受容を概観する展覧会「ポスターでみる日本映画史」は、新フィルムセンターにおける最初の映画資料展示として開催され、御園氏が生涯をかけて収集したコレクションの充実した内容を改めて知らしめるとともに、「映画生誕百周年」を祝うにふさわしい企画として好評を博しました。その続篇となる今回は、再び「みそのコレクション」の中から精選したポスター約80点を通して、さまざまなトーキー形式が台頭した1930年代から戦中・占領期を経て、日本映画が国際的な注目を集め戦後の黄金時代までを振り返ります。



虎の尾を踏む男達(東宝、黒沢明監督) 1952年



雨月物語(大映、溝口健二監督) 1953年



唄祭 三度笠(日活、伊藤大輔監督) 1934年



長屋紳士錄(松竹、小津安二郎監督) 1947年



象を喰つた連中  
(松竹、吉村公三郎監督) 1947年



春の目ざめ  
(東宝、成瀬巳喜男監督) 1947年

# ポスターでみる 日本映画史 PART II みぐのコレクションより



赤穂浪士 大忠臣藏(横田商会、マキノ省三監督) 1955年

この間、専らモノクロの芸術であった映画作品そのものとは対照的に、あざやかな彩色をほどこされたこれらのポスターは、斬新なデザインやそこに添えられたテキストとともに固有の美学で見る者を魅了しながら、あるときには時代の栄光につつまれた数々の映画の面影として、またあるときには失われた映画が残したわずかな存在証明として、さらには映画をとりまく時代の状況や世相さえも伝える歴史的な史料として、興味深い体験をもたらしてくれます。

とりわけ、映画作家の戦場からの復帰を告げる「長屋紳士録」のポスターや国際映画祭用に作成された「近松物語」の英語版ポスター等はもちろん、トーキーの時代に蘇った澤田正二郎の「國定忠次」や占領期間の終了に伴って公開留保を解かれた「虎の尾を踏む男達」、1955年に再公開された尾上松之助の「大忠臣藏」のように、フィルムが製作時とは別の時代に新たな命を付与された様子を物語るポスターもまた、広大な映画史の地平へと我々の想像力をいざなってくれることでしょう。

散逸を免れたポスターがたたえる、フィルムとはまた異なる《迫力》を感じとっていただければ幸いです。